

株式会社越野鋳工所
越野 正さん
Koshino Tadashi

Profile

金沢で金属加工を始めた祖父、建築板金会社としての基盤をつくった父の後を継ぐ3代目。高校卒業後、カーディーラー勤務を経て20歳で家業に従事。各種加工設備を有する強みと独自の創意工夫で業容を拡大する。能登半島地震後は仮設住宅の建築工事にも携わる。



株式会社越野鋳工所(能美市)

加賀エリアを中心に、工場やドラッグストアなどの大型施設の建築板金を数多く手がける。数々の成型加工機を取りそろえ、現場や要望に応じてオーダーメイドで対応できる点が同社の特色。【所在地】能美市寺井町ソ151-3【資本金】1,000万円【代表】越野正



レジェンドの金言

選ばれる職人を目指せ

板金工事は目に見える形で長く残るものですが、そこには見えない技術も注ぎ込まれます。「誰でもいい」「安ければいい」ではなく、品質で選ばれる職人でありたいと考えています。



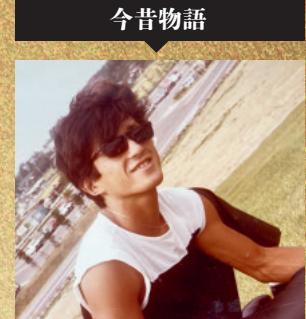
自分で考え、やり方を変えていく。
そうすれば、仕事はぐっと面白くなります。



次男の巧さんと一緒に。巧さんは建設機械メーカーに3年間勤務した後、越野鋳工所に入社しました



現場へ向かう準備をする越野さん。資材の運搬に使う台座も、使い勝手の良いものを自作しています



越野鋳工所に入社した頃の越野さん



辰口丘陵公園の屋内テニスコート。レールと台車で駆使した屋根の改修工事は、業界の大きな話題に

地上からは見えない
「屋根の上」が仕事の舞台

一口に板金といっても、使用的する金属材料の種類や板厚はさまざまです。一般的な住宅で使われる板金は、薄物と呼ばれる薄い金属板が主流ですが、工場など大型の建築物、いわゆる“野丁場”には厚物と呼ばれる鋼板が使われます。越野鋳工所が得意とするのは後者です。舞台は、何本もの鉄骨がレール状に渡された広い屋根の上。一列に並んだ職人が、長さ数十メートル、時には百メートルにも及ぶ屋根材を呼吸を合わせてスライドさせ、所定の場所に次々と施工していきます。単純に屋根を上げるだけではありません。その現場にあった工事のやり方も、加工や施工に使う治具や道具も、越野さんが考え、実際にかたちにしています。

自社でさまざまな形状の壁材を加工、
新たな需要を開拓

「小学生の頃から工場で手伝いをしては、わずかながらお小遣いをもらい、自分が欲しいものを買っていました」と振り返る越野さん。手伝うのが嫌という気持ちは全くなく、自然に板金という仕事への理解を深め、対価を得て働く楽しさを学んでいたといいます。

家業に入ったのは20歳のとき。積極的に設備投資をし、職人を育てて会社の地力を強くしていく父のやり方を見ながら、充実した機械設備を活用して今ある仕事を効率化すること、そして新しい板金の仕事を増やしていくことに注力しました。

ターニングポイントのひとつは、金属製の壁材を成形できる加工機を導入したことです。間屋に頼らず、自社加工で壁材を調達できるようになり、工事期間の短縮やロス削減、施工ニ

ズへの柔軟な対応が可能になりました。

既存のやり方を変える
新しいやり方を考える

決められた作業を決められた手順でこなすのではなく、より効率的なやり方から考えるのが越野流です。印象に残っている仕事をたずねると、辰口丘陵公園の屋内テニスコートの改修工事だと教えてくれました。

「片側の屋根面の工事を受注したのですが、敷地が狭くレッカー車は入れないため、どうやって材料を屋根に上げようかと思案しました。思いついたのは、地面にレールを敷き、材料を乗せた台車から屋根の上に材料を送り出していく方法です。その場所の作業が終われば、台車を横に移動させ、次の場所でまた材料をどんどん上げていきます。これが想像以上にうまくいき、予定していた工期より早く屋根が完成しました。」

鉄骨加工ができる強みを活かし、車庫など鉄骨構造物の施工も請け負っています。工場で角パイプを組んで3枚の“壁”を仕上げ、これを重ねてフラットな状態でトラックに積み込み、現地で組み立てて屋根材を張るという効率的な工法を開発しており、ここでも越野流が貫かれています。

越野さん自身と同じように、小さい頃から工場で働く父の背中を見てきた二人の息子は今、父と肩を並べて仕事をしています。「自分で考え、アイデアを出し、必要な道具があれば自作し、より良いやり方に変えていくことで、仕事はぐっと面白くな

ります」と越野さん。若手職人は、その姿から多くのことを学んでいます。

ダイナミックな現場を手掛けているのとは対照的に、プライベートでは繊細な金工作品を制作しています

